

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和6(2024)年
6月号
通巻646号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和6年6月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監修
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



大倭紫陽花邑に遊びに来た奈良公園の鹿

青山法義さん撮影(文・8頁)

昭和45(1970)年5月23日 月次祭法話より

かん 全て平等である神ながら

法主 矢追日聖(満58歳)

『すまのお』紙に書いたら

今日は5月の月次祭でございませう。新緑の候が過ぎまして、もう全く若葉の季節になりました。今日もどんよりと暑うございまして、こういうような天候の傾が、これから伸びていく若葉を適切に生育する旬だと思えます。毎年季節は同じように巡ってくるんですけども、これを私たちが決まりきった出来事だと受け止めおれば、それまでなんです。

けれども、もし季節が狂ったとしたらどうなるだろう、と考える必要がまたあると思うんです。地球環境が今はこうして安定していますけれども、破壊される時が来るかもしれない。私たちはぎつと明日もいつも通りだと信じきっているから安心して暮らせるんです。同じことが我々の人生に対しても言えると思うんです。

今日皆さんの手元に渡っております『すまのお』紙の2ページ目に、これからするような話をちよつと書いておきました。どうせ後で皆さん方と話し合いますと思えますけれども、こんなことをなぜ書く気になったのか。

今まで3回か4回、ずっと対談が続いておるんで、今月は1回何か書いてほしいと編集の方から要望がありました。それでいつものようにペンを持った瞬間ひらめいたことを書かせてもらったんです。かなり深い内容を書いたので、皆さん

方には通じにくいかもしれませんが。というのは、言葉の意味がわかるかどうかだけではなく、皆さんがそういうような心境になって生活できるかどうかということなんです。同じ内容を今まで皆さんの前でいろいろ話してはおりますが、「神ながら」という一つのものに絞ったことしか言っていないです。「神ながら」と一言で済ませていただけますけれども、その一言の中をのぞいてみれば、広がり無限大にあります。

結局いつも言いますように、我々人間が抱いている平等観というものが、これが宗教の根本だと思わんです。あなたたちは常に人と比較して、自分を低く見たり高く見たりする。「わしはあの人よりも偉いんや」とか、「私はあの人よりもあかん」とか、日々の生活の中で、そんなことばかりしょっちゅう気にしておると思うんです。そういうような気持ちを持っておるあいだは、どれだけ大傑へ出てきて信仰されても、ちっとも効果がない。つまり、神の心に近付くことができない、ということなんです。

自分の命と信仰の対象

『すざのお』紙にも書きましたように、もう私もめったに100歳まで生きていかれない。仮に生きたとしても、あと残り40年。ただ飯食って糞こいて、これからも生きるんですけども、それじゃこれからの私の生涯は別に何か変わったことでもない。一年一年老化していく、飯を食うた回数が増える、しゃべることはいつも同じ「神ながら」一つ。そりゃ今日死んだって40年先に死んだって、私自身にしてみれば同じことなんです。

けれども、自分がこうして生かされておるあいだは、最大限自分の気持ちに逆らわず過ごさなけ

ればいけないという、神に対しての私自身の義務があるんです。今日ここで病気になるってお迎えが来れば、私の生命はそこまです。こうなれば一番気楽なんです、今のところは今日明日にでもお迎えが来そうにないんです。

私が仮にこれから40年生きとつたとすれば、まあ大傑へ集まって来る人の顔が変わるとか数が増えるとか、あるいは現在の大本宮の敷地がもうちょっと美しくなるとか、木が生えているところに家が建つとか、その程度の変化があるだけなんです。

私のやっているような事、あなたたちはもし自分がそうであつたらというようなね、一応立場を変えて考えてみることもほんとに必要だと思う。ただこうして30分間話を聞いて「はあ、今日は結構な話を聞かせてもらうた」て、それは涙をこぼして喜んでおられる方もありますけれども、私はいつ言うたって話は一つも変わっていないんです。もう30年ほど同じ話をしゃべっているんです。あと40年仮に生きさせてもらつたら、また同じ話をしゃべるだけです。

これが私の命ですから、それでいいんですけれども、現在において何かの信仰を持たなければ自分も、生きていくのに何やら知らんけど心細いとか、あるいは頼りないとか、人間にはそうした弱みがある。信仰するとは信じる世界を持つことですから、非常に尊いんです。では一体何を信じているのかをね、あなたたちはよく考えたことがあるだろうか、と聞きとうなってくる。そこに私は本当の問題があると思う。

よく「私は不動さん信仰してます」とか、やれ「観音さん信仰してます」とか口で言う人はありますよ。しかし、不動さんとか観音さんとかにただもたれてすがっているというだけであつて、そ

んなものは信仰とは違うんですよ。

自分の心の中に、また自分の一生を通じての人生の中に、自分のものとして自分の中にかちりとつかまえておるものが信じられるもんなんです。自分自身から離れたものの中に信じられるものが、あなたたちにあるのかないのか。私にはありません。私が本当に信じるものは、もう自分以外にないんです。自分の生命というものの、自分のこの世に生まれさせてもらった命というものの、それを信じる以外私には何もありません。自分の命を信ずればこそ、命に対して自分が忠実であればいい。それで皆さん方の前でこうした話もするわけです。

大倭教という宗教については私の眼中にないんです。言い換えれば「矢追日聖」も「大倭教」も、呼び方の相違だけであつて別名みたいなものから、私自身がこの場所です新しい宗教を開いたというようなものは何もありません。あなたたちと同じように、私は一つの宗派の教祖となる宿命で生まれてきたんじゃないんです。

けれども、役目というか命というか、私はただこういう類いの行いをしなきゃならない。だから自分は自分なりに当たり前の事を実行しているだけであつて、別に大した事でも何でもない。私が捉えた「神ながら」というものを、しょっちゅうこうしてしゃべっているに過ぎないんですよ。

これくらいアホくさい話はないんですが、自分の命に対して自分が忠実に生きさせてもらおうとすれば、こうしなければいけないんです。私の人間感情からすると、わからん事をなんば言うて相手にわからせようつたつて無理なんだから、こんなアホな事は言わない方がましだと、私の潜在意識はそう叫びます。でもこれが自分の持つて生まれた自分の役目というものだから、飽きもせず、

うたてがり(11いとわしく思い)もせず、今日まで話し続けてきているんです。

あなたたちにもまた、あなたたち自身の命があるはずで。それが何なのかちよつとわかりにくいでしょうけれど、現在の皆さんの家庭、あるいは生活環境の中に、持って生まれた自分の命を見出し出すのが一番近道ではなからうかと思うんですね。生活とかけ離れた命というものは一切ないんです。

仮に魚で生まれておれば、水の中で泳ぎ生活する。あるいはまたセンチ虫(11ウジ虫)であれば、お便所の中の大便小便の中で毎日上になったり下になったりしながらグジャグジャと生活しておる。そこがもしきれいな水の中だったら、センチ虫はすぐ死んでしまうんです。

結局、自分が置かれておる今の環境、今の状況が自分に与えられた命の大半を占めている。それを踏まえて自分なりにいろいろ考えたらいい。また大倭へこうして出てくることも、あなたたちの命の一部分であろうと思うんです。

同じ靈魂でも働きは違う

同じ一つの故郷、いわゆる大宇宙という神の世界からここへ分かれて来た生命体というものは、あなたたちの肉体にも私の肉体にも宿っている。あるいは犬や猫にも宿っている。この生命体の質というものは何に宿っていても全然変わらないんです。大和で降る雨も大阪で降る雨も恐らく根源は同じはずで。だから私の中に入っておる生命体も、あなたたちの中に入っておる生命体も、宗教的に言えば靈魂ですが、同じ種類、同じ質のものなんです。

けれどもそこに一人一人の個人差がある。質は

同じであっても、形は変化する。また働きにおいても、それぞれ別々の種類がある。例えば同じ電気を流しても、モーターの中へ流れ込んだ電気はプロペラを回す。電灯の明かりに変化する場面もある。あるいはまた熱を生じさせる場面もある。現代の文化生活の中で、あなたたちの使っておられるいろいろな電気製品に流れる電気はどれも一緒です。けれども、力を生み出したり、光や熱になったり、いろいろな種類の働きが生まれてくる。

天地自然の大きいなる宇宙の大霊という同じものが私の肉体に通じた場合、またあなたたちの肉体に通じた場合、その人その人ごとに働きが変わってくる。それがみんな一人一人個人差があるということなんです。

体力一つとっても、十貫目持つ人、二十貫目持つ人、五十貫目上げる人、いろいろな相違がある。また人間の心の持ち方、知能、これもみんな違う。この個人差というものは天地自然が作ったものです。人間一人にはその人だけが持つておる、神から与えられた特徴が必ずあるはずなんです。それをまず自覚しなきゃいけない。

宗教団体が信仰の質を下げる

現在の宗教と称するものは、ほとんどが神の道とか人間の道の根本的な教えに逆らっているんです。『すさのお』にも書いておきましたけれども、宗教団体というようなものができる、これが宗教を根本から破壊させていく一つの動き方です。言い換えれば、宗教団体が発展すればするほど、宗教の質は低下する事をよく知ってほしい。

現在は宗教法人法があり、宗教団体というものが日本だけでもたくさん作られています。けれども、信仰する一つの宗教に対して、そういうよう

な信仰する人間の集まり、グループ、団体が大きくなればなるほど、宗教の中身が伴わなくなっていく。

えらい簡単な言い方しましたけれども、これを端的に受け取って理解できる人はあまりいないと思うんです。頭では理解できたとしても、それが自分の本質、心の中から本当に感じ取れる人がどれだけおるだろうか考えた時、いつも情けない気持ちになるんです。

一つの宗教団体というものは、特定の目的を定め、組織力をもって信仰する人たちを団体の中へ取り込んでしまう。宗教を決められた枠とか教義とか、そんなもんで括るべきじゃありません。

宗教とは人間一人一人が心の中においてつかうものであって、幸せのために信仰すると言っても、このあいだも話し合ったように、人によって幸せは違うんです。幸せが違えば信仰も違ってくるんですから、信仰を一色に塗り潰した一つの団体の中へ自分が入った場合、神の法則に反することになる。

組織のある団体に新参で入った者は一番下っ端です。その上に役員さんがある。そのまた上には偉いさんがおる。頂上にはいわゆる教祖と称するような大きな権威者がある。このいわゆる組織というものは信仰と関係のない、ただの形に過ぎない。それを宗教だとか、やれ信仰だとか、自ら進んで持ち上げて「あー教祖さん来はった、ありがたい。目開いたら目潰れる」といった信仰をする者も、そう言われて喜んでおる者も、どうかと思う。これはもう宗教として言う、一番忌むべき問題なんです。

団体に取り込まれると、まず物事の序列とか優越感・劣等感を気にする。また、自分の入っておる団体が唯一絶対の宗教で「それ以外の宗教はみ

んな悪いんや」「助けてやるためにうちの宗教に入れよう」とか考える。うちの宗教とかどこそこの宗教とか、持ち物じゃないんですよ。天地自然の一つの法則、宇宙の仕組み「神ながら」というものは、誰一人所有していない。所有者はいないんですよ。

我々人間が自然の中において、一番後に形作られているんです。その人間がですよ、我々を作ってくれた宇宙の根本の仕組みを捉えて、「それはうちの御本尊や」とか、「これはうちの教え」とか偉そうに言う。宗教というのは人間一人一人の心の中に生きておっただけなんです。

「大倭教にはどんな教えがある？」って聞く人もあります。まあ仕方がないから「これはこんなやどんなんや」と私がアホになって説明していただきますけれども、私の本心では「あほんだら」って言いたくなるんですよ。大倭教っていう教えがあったら不思議なんです。ないのがホンマなんです。そこそこね、皆よくかみ分けてほしい。

けれども今の社会一般の人は、そういういびつな信仰を宗教だと思っておるから、大倭へ来て「大倭の神さんは何神さんですか？」「大倭教の教えは何ですか？」と、くだらんアホなこと聞くんですね。宗教を、「神ながら」をわかっていないんです。

けれども、そんな人の守りするのがまた私の命ですから、アホくさいなんて思わんと、まあ「神ながら」がどうやとか説明しているんですがね。お守りしているんですよ。こんなものは救いでも何でもありません。

大倭へ来る人たちはね、やはり私とこうした個人的な人間関係を結ぶような深い縁の持ち主だと私は信じているんです。そんな人であれば、大倭教の教えがどうであるか聞こうとするよりも、ま

ずお互いに人間性と人間性を、心と心を触れ合おうとしてほしい。

草木も人間も同じ生命体

私ら空気は吸わしてもらっているし、土から出てくる水、天から降ってくる雨、結局こういうような恵みがあればこそ、私自身の肉体が現在生かされている。自分が生きていくために必要な一番身近な物、私はこれが一番大事やと思うんです。だから私は水に対しても農作物に対しても、喜び、感謝の念というか、自然と共にありたい、共に行動こうという気持ちがある。それがいわゆる「神ながら」の道にも通じることにもなるんです。

ややもすれば、今私がこう話している時に、こへ集まっておる人間だけが私の話を聞いておると皆思っているかもしれません。けれども、私の目の前には池（※拜殿前の鏡池）があり、その水には睡蓮すいれんがある。

あそこにはツツジがある、桜がある。ここに座っている人間一人と、この鏡池の上に浮かんでおる睡蓮の葉一つと、どちらも同じ存在です。

だから私はここにおる人だけに物言うてるのやなしに、いつも池の水の上を見ながら睡蓮の葉にも話しかけておる。こちら

の桜にもです。水の中にも、土の中にも、木の中にも、人間に宿っているのと同じ生命体が等しく宿っているんです。

この拜殿の中に座っておる者は人間の姿をしておるけれども、睡蓮の葉のように水の中から出てきて浮いておる者、また木々のように葉があり幹がある姿を持った別の者もたくさんある。これみんな私たちの一番身近な仲間です。人間だけが人間の仲間と違うんです。

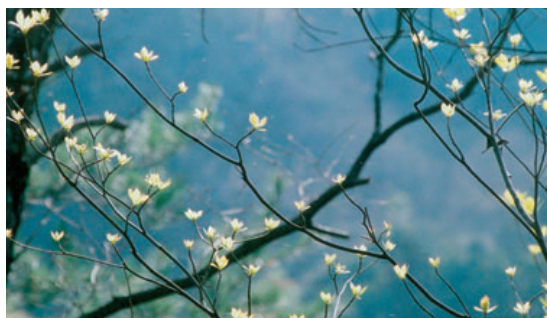
我々人間が自然に対して最も親しみをもち、またあるいは自然との一体的な考え方をもし持たなければですよ、私たちは本当の精神的な喜びを恐らく得られないと思う。

人間が人間だけの世界でどないして幸せになり、喜びを持てるか。人間以外のいろんな動物であれ植物であれ、私たちの仲間であるという意識があればこそ、朝起きて外を見た時に「ああ今朝の桜の葉きれいや」とか、「睡蓮もうじき咲くや」とか、必ず呼びかける心境になるんです。

人間と草木が同じように生活し、やっぱり同じように太陽の恵みを受けたり同じ雨を受けておる。同じ条件によって人も草木もみんな生かされているんです。人間だけを切り離してこの世を人間だけの世界と捉えることは、神の心に根本から反することなんです。

自然と人間の結び付き、そしてお互いに交流し合うて幸せにやってくという「神ながら」の神の心、そのような心を捉えるのに、百万二百万の人間ばかりが集まって、何々教団だとか何々教だとかの、優越感や差別をもって喜びとするような人間の集いであつたとすれば、そこに宗教はありません。絶対に神さんもなし、仏さんもなし。けしからんことなんです。

だから私はいつも「大倭教は団体でないんや、



信者もいないんや」と言うんです。大倭という場を一つの軸として、集まってくる人たちが自分なりに、みんな幸せになる。これが本来の宗教だと思っただけです。

本当の御本尊をつかんでほしい

月次祭ですから、今日の話は私の愚痴ですけれども、これからぼちぼちこういう愚痴を私はあなたたちに言おうと思うんです。私の愚痴をあなたたちは人間の言葉として捉えているけれども、草木もみんな聞いてくれとりますね。あんたらだけと違ってたくさん相手がおるんで、それからって気色いいんですがね。

私も人間ですから、時々愚痴こぼすのも一つの健康法です。自分が自分に愚痴言うのもいいから、やっぱりこんな時に声出して言うわけです。

けれども、なんぼ愚痴こぼしたか、私の行き方というものは決して変わりません。あなたたちがそう信じてくれたら、私がどんなこと言っても、「また愚痴こぼしてはるな」程度に聞いてもらえばいい。けれどもこの愚痴はね、神様に代わってこぼす愚痴やから、同じ愚痴でも内容がちよっと違うんですよ。

あなたたちも心の眼をパーツと広く開いて、本当の信仰とはどんなものか、神さんってあるのか、どの信仰と比べて、神さんやとか、まあ禊会でもやっていますけど、自分に問うて自分の心の中にあるほんまの御本尊をつかんでほしい。つかんだ瞬間には、「あれ？これは自分であった」と最後にわかる。自分を自分が信仰しなければ、信仰する対象がないはずなんです。

でも「神ながら」の御本尊は自分の心の中にあ

るとただ信じていけばいいとか、そんな薄っぺらい信仰とは違うんです。「もう疑いようがない、これはあるんや」と信じ切る、そういうことです。いわゆる一つの限界を越えた信じ方、仏教では色だとか空だとか言うけれども、その色・空を超越した空だと般若心経が教えてるような意味ですね。

例えて言えば、胃腸の働きなんか全然考えなくて飯食ってる時のような心持ち。食うたら栄養になるんやし糞が出るんやけれども、そんなこといちいち考えながら飯食ってる人はいないですよ。それと同じ。信じるあいだは、まだ疑う心があるから信じるんです。

自分の御本尊というものを絶対神のつもりで自

地下水

昭和30(1955)年7月1日

法主 矢追日聖

法主様がかつての機関紙『大倭』の「地下水」というコラムで書かれた文章が興味深いので、当時の編集部のコメントとともに再掲載させていただきます。なお、現在の一般的な医療・医学の立場とは異なる見解および誤解を招きかねない表現を含んでいます。読みやすいよう漢字などの書き換えを一部行っています。(編集部)

悪疫流行に関する 法主様の予言と注意

大倭大本宮を訪れて見える多くの方は病患の相談である。自分の体は自分が一番よく知っている筈なのに思ってから医者や薬や神様だとまるで人ごとのように騒ぎ回る者が多い。思う原因はすべ

分の心の中にしっかりとつかんでいるかどうか、まああなたたちにははっきりわからんと思うけれども、これからは自己反省とか人間的向上を目的として、暇があれば時々大倭へ遊びに来てもらったら結構だと思います。

明日は布留のお宮さんへ、すさのお会の文化行事で行く予定になっておりますので、私もできるだけお供さしてもらおうつもりです。布留のお宮というのは石上神宮ですが、天理市の天理教会本部のちよつと東側にあります。今我々がその場所へ行つて、一人一人が過去の人たちの信仰の足形に何かを感じ取っていくこともまた、自分の信仰の何かプラスになると思います。明日は日曜ですので、できたら皆さんの参加を望みます。

て自分にあることを認識すべきである。病み患いは決して名誉ではない。むしろ恥と心得るべきであらう。

法主様は「信人達にこれ程前もって注意している筈なのに、患へば得々と相談に来る者も多くある。中には神様を祀ってお給仕を欠かさずしているのに次々と病気になるのは何故ですかと問うてくる心臓組もある。信仰すれば無病息災、商売繁昌疑いなしといったような教えを未だ説いたおほえがないのだが」と時々嘆息をもらされていることもある。

脳炎に類する流行病 (以下法主様の談話)

今年もほぼ昨年とよく似た流行病が出て来る

が、今年の方が少々ひどいように思う。これは幽界の動きを見ての話だがね、本年の晩春から夏期、それから秋口にかかるまでは脳炎のような病が特に流行する。子供は病患に対して肉体的な抵抗が弱いために罹る率が多い。世の親達に警告しておく。

ここ数年前頃から空中に脳を侵す細菌、その菌は現在使用されている顕微鏡では一寸見られないような微細なもので、それが遍満している。そこで霊のようなこの菌が繁殖するに最も良き条件を体で作った時に罹るわけである。冬期にはこの菌が悪性流感として表面化した。本年二月七日頃の新聞を賑わした所謂インフルエンザ、ビールス菌もその一現象である。この種の菌は未だ科学的には、はっきりと究明していないので予防薬も確実なものがないように思う。社会一般の人は去る冬期に大なり小なりこの流感の菌を受けているので、これを基礎として今夏は更にこの菌が脳炎症状が体に現われてくる。

これらの細菌は脳脊髄の中に最も強く繁殖する特徴をもっているので、現在医学の治療法では相当困難を伴う筈である。夏期流行のこの脳炎系の病患をここでは「熱射病」として扱う。

熱射病の初期は頭部が重くなり、時々胸のあたりが苦しくなり、吐気を催すことさえある。勿論下痢を伴う場合もある。こうした症状は各々体質によって異なるが、脳脊髄に潜在する菌は体内の最も弱い臓器に向かって進行する特徴があるので得体の知れない病名もはっきりしない内科の病患となる。真性脳炎になるまでは大抵肺、心臓を侵され、中には発作的な精神異常のようにもなり、脳炎血(※脳出血か?)のように倒れ意識不明になるものもある。又神経痛が出たり、口から血を吐くことさえある。しかしこの吐血は結核性ではない。

予防の方法

当教団の信人にはウルサイ程注意してきたつもりだが罹る者も——勿論軽いが——相当ある。一応この熱射菌は夏期には誰もが保菌していると考えればよい。予防の第一は頭部に太陽の直射やボン照りを避けるため帽子か傘を必ず用いること、腸を冷さないこと、将に寝冷えに注意すること、から足首を暖めておくこと、冬期に冷し又風邪に罹った者は最も危険だから特に気をつけること、万一罹った場合は長期に亘って氷で頭を包むことが最適であり、腹部は温湿布で腸の熱を取るよう心得るべきである。

法主発掘の陶棺と道鏡と「昇ちゃん」



昨秋に奈良市埋蔵文化調査センターで「令和5年度秋季特別展」として「亀甲形陶棺—変化と地域性」と題した展示会が開催された。そこに大倭大本宮で保管されていた陶棺が同センターによって立派に修復されて展示された。この陶棺の出土の経過について法

主様は次のように記されている。
《もう三十年程前だが、私は私の所有地に新道をつけた。土師の破片が見えたので注意すると、奈良朝頃の陶棺の埋まっているのが見えた。工事は停止して家の出入りの人足を連れ写真機や実測の道具を用意して現場へ赴いた。この人足というのは、百姓で土方仕事もやっている田舎では珍しい屈強で器用な男である。

その男が私の指示に従ってゆるゆるとシャベルを入れ始めると急に顔面蒼白になり地べたに転んでしまった。海老のようにちぢんでうんうんと呻いていた。腹痛のようだった。暫くするとじっとおさまるのだが、発掘させるとまた同じ状態になる。二人の弟を手伝わせて私が掘ったのであるが、こんな場合は一概に偶然だと片付ける訳には行かない。この陶棺は今も私の手許に割れたまま置いてあるが、これと何のかかわりがあるのかは知らないが、この棺からかつての怪僧、道鏡の姿が現れた。(昭和43年5月23日発行「すさのお」より)

この道鏡については杉本による後日談がある。この道鏡のことだったか思い出せないのだが、突然弓削の道鏡が出てきて、「ナカムラシヨウジワガミナリ」と言う。平成29年4月30日に帰幽された中村昇次さんが元氣だった頃のことである。昇ちゃんが道鏡の生れ変わりなのだと教えてくれた。今年の2月9日に帰幽された岸野春子さんにはずいぶんお世話をかけていた超自然児の昇ちゃんであったが、彼の前夜祭(通夜)で聖歌が歌われはじめた頃、「ミミミ イタダキマシタ」との声を聞いた時、聴覚をなくしていた昇ちゃん的心だと分かった。
現界に出ていた御霊が再誕してくる時、前世に残して(?)きた諸々が因となって再誕してくるものだと思うようになった。(編集部)

令和5年5月29日～6月5日
こもれる魂魄の地を訪ねて(第54回)

東北・北海道の旅

杉本 順一

その5

予定変更、余儀なく

6月2日(7時00分)起床予定の5時半には目を覚ます。旅行中も朝一番にするのは新しいお水を供えて、「金剛大龍王さんを始め東西南北と天海の龍界の皆さん」にごあいさつ。今朝は珍しく「オオヤマトタカマノハラモ ヘイアンノキガシ」(大倭太加天腹も平安の祈願をいたす)と声をかけられた。こんなごあいさつは初めてで、改めて旅行の意味を教えられた気がした。朝のテレビニュース、奈良は大雨予報。奈良公園では小鹿が20頭誕生、集められて育てられているとのこと。ここで見ると、奈良の情報も新鮮に感じる。

(8時45分) ホテルチェックアウト。(9時10分) シャトルバスで新千歳空港へ。(9時30分) 新千歳空港に到着。運行状況の表示ボードに「稚内行き調査中」。本州は大雨、北海道のみ晴れ。

(9時45分) 視界不良のため稚内行きが欠航決定。この便の予約者だけ、別カウンターで速やかに対応していただき、私たちは翌日のプランがあるため稚内行きをキャンセル。この日の最終目的地、女満別空港行きを早め、18時45分の予定だった出発便を、13時20分に振り替える手続きをしてもらった。(11時00分) 新千歳空港内のレストランで昼食をとり搭乗口へ。地方空港用のプロペラ

機の搭乗口は空港の端の端にあるため、専用バスで移動し、無事乗り込み、予定通り出発。

(14時00分) 女満別空港に到着。この日北海道で荒天なのは稚内だけだった。予約済みのレンタカーで、一路日本最大のカルデラ湖である屈斜路湖へ。両脇一面に広がる畑。その一本道をひたすら進む。ヘアピンカーブが続いていても、整備された高原の雰囲気と道幅の広さのおかげで危険は感じないと運転係の娘。

それを聞いて、私は昭和33年の高校修学旅行での土煙バスの臭いと美幌峠を思い出す。

(15時20分) 標高493mの美幌峠を越えて下りに入るところで、眼下に屈斜路湖全体が急に現れ全員が声を上げる。慌てて美幌峠に引き返し、道の駅「ぐるっとパノラマ美幌峠」に車を止め、展望台の方へ。私は修学旅行の時に写真を撮った場所から眺めた。娘らは丘の上まで足を延ばす。娘らが戻って来るまで大きな岩に腰掛けて細君と待つ。(15時45分) 峠を下り屈斜路湖畔を走る。道路脇にキツネがいた。

(16時15分) 2泊予定の屈斜路プリンスホテルへ。宿泊先にこのホテルを選んだのは、娘たちの旅行プラン計画中にアイヌの霊界人から、「このホテルから屈斜路湖の景色を見てほしい」との言葉があったからです。おかげで見晴らしの良い10階に部屋を頼んでくれてあった。

屈斜路湖を眺めながら夕食までゆったり過ごした。もし稚内に飛んでいけば、北海道旅程でもっとも忙しい一日になるはずだったので、今日の稚内行き欠航決定は、旅行中1人で運転してくれている娘のために頂いた神はかり休憩タイムと、素直にうれしかった。

夜中、一眠りしてトイレタイム。すぐに眠りに入れず、ここ数日の旅のことに思いをはせる。

「氷雪の門」に関わる話の中で、思いが湧いてくるのは「九人の乙女」たちのこと。法主さんから、この九人の人たちのことを「ギジント ヨベ(呼べ)」と強い口調で言われた。

「ギジン」とは、覚悟の死を迎えた人たちのことだ。直ぐに「義人」が浮かんできた。わが身の利害をかえりみず他人のために尽くした人たち。単なる乙女たちと考えるなということだ。

眠りの方に心が向かないでいたら、すごい数のアイヌの人たちが見えた。アイヌの主という霊人から声が伝わってきた。「ワジンヘノ ウラミノ ココロミチアレドモ イマ ワジンカラノ ツカイノモノニ アエタルハ ウラミノココロラケシテケレルチカラアリ ソノチカラノモトハワノヒカリニアリト カンジタリ ミナミナトトモニ ウレシキココロナリ ヨロコビナリ(和人の恨みの心満ちてあれども、今和人からの使いの者に会えたるは、恨みの心を消してくれる力あり。その力の元は和の光にありと感じたり。皆々と共にうれしき心なり喜びなり)」と私は感じた。アイヌの皆さん、こんなお話をありがとございます。

考えるまでもなく大倭会の文化行事でお訪ねする所には、いつもこんな話が待っていてくれる。法主さんでもいい、日聖でもいい、一緒に動いてもらえることを素直に思えたらいいと思う。

*

後日(8月7～9日)、私を邑に置いて女3人での稚内旅行を組み直し、稚内公園にて樺太島民慰霊碑・氷雪の門、九人の乙女の碑、樺太犬供養塔などに手を合わせた。霧雨と強風で陰鬱とした宗谷岬は、樺太に戻れない方々の望郷の思いを映しているようだったが、今年の祖霊祭(8月30日)に間に合うように訪れることが出来てよかった。

あじさい日誌

5月8日 午後5時から本紙の編集会議が教務本庁で開かれました。

5月12日 午後2時から大倭会主催祝会が大倭拝殿において開かれました。

5月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

作業中に手の怪我をされた家麻呂教長さんが左手を保護して祭主を務められました。

5月17日～18日 F.I.W.C有志で、2018年に亡くなったキヤンパー・別府敏裕さんと野浩一さんをしのぶ集まり「京都巡礼行」を実施、36名が参加し、追悼の念を届けました。

5月18日 定年まで大倭安宿苑

の寮母として働き、最近は大倭会館で健康体操(真向法体操)の指導をされていた石川君子さん(91歳)が帰幽されました。

5月20日 昨年11月19日に奥津斎庭に金剛大龍王さんの寝床と称して新畳敷きをした場所を最近になって見事に?ぐちやぐちやにされて困らせていた犯人(アライグマ)が捕獲され、奈良市の農政課に引き渡されました。

邑の鏡池で久しくお目にかからなかったカルガモの子供が生まれました。

5月23日 午後2時から大倭大本宮の月次祭が行われました。

この日は昭和39年5月23日の法話をお聞きました。

法主さんの法話の録音を毎月音声で聞いておられるのはごく

限られた数の方ですが「霊界ではどうなっているのだろう」と考えていたら、太郎坊大善神さんが「法主の光を頂いています」と教えてくださいました。(杉本)

以前紫陽花邑に住み、菅原園で働いていて、現在カナダ在住の齊藤光代さんが久しぶりに邑を訪れました。『おおよまと』令和3年9月号「寸沙」を参照。

5月25日 交流の家でF.I.W.Cの定例委員会が行われました。

5月25・26日 大倭会館と交流の家で16人の参加者が「ミニ賑い塾」を開催しました。

5月31日 邑の紫陽花が色付き始めました。

午後5時から本紙の編集会議が教務本庁で開かれました。

6月4日 午後5時から本紙の編集会議が教務本庁で開かれました。

6月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

夜6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

5月10日 法人成立68周年記念日でしたが、今年も感染症予防の観点から残念ながら式典を中止し、施設ごとに特別食でお祝いをしました。午前10時から大倭安宿苑守護神成謙坊大善神にご挨拶を行い、その後各施設にて永年勤続職員に施設長から感謝状と記念品が贈呈されました。

た。永年勤続表彰者は、30年が1名、20年が4名、10年が4名でした。

6月5日 10時半より介護福祉士合格職員1名に資格取得手当授与式が行われました。

(菅原園)
5月10日 職員によるウクレレ演奏「チエツカーズ特集」を行い、皆で楽しく音楽を聴きました。

5月13日 午後から1階交流ホールで「おひさまデパート」を開催し、思い思いに買い物を楽しみました。

(須加宮寮)
5月10日 法人成立記念日で、施設長のお話の後、午後からカラオケを楽しみました。

5月30日 単独防災避難訓練(夜間想定)を行いました。ヘルメットをかぶり玄関のピロティに避難しました。

(長曾根寮)
5月4～5日(特養) 職員の手作りのかぶとと鯉のぼりが描かれたイラストを飾り、端午の節句にまつわる話を聞きました。

5月6日(デイ) 一つずつ鯉の

て清霊月よ大時
し内祖8時お8
の境・係9な前
事の祭係9な前
神夏大関午すは
掃光の程日れ清
清は東日(日)ま掃
年行の日(日)ま掃
行はの日(日)ま掃
掃はの日(日)ま掃
祭はの日(日)ま掃
4日行の日(日)ま掃
りはの日(日)ま掃
か行の日(日)ま掃

ばりの長い風船を作り、投げ飛ばして遊びました。

(茂毛路園)
5月10日 法人成立記念で創作料理(お弁当形式)をおいしく頂きました。

(八重垣園)
5月15日 訪問の理美容が行われました。髪を切ってもらい、「若返ったでしょ」と笑顔で話されました。

*月次祭(大倭神宮)
7月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会
7月14日(日) 午後2時より大倭拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)
7月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
7月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

5月1日突然「この辺りに鹿

「えっ、タヌキはおるけど……」のやり取り、外を見ると鹿の姿が。頭を見ると角の切られた跡。奈良公園からやってきたんだと気付きました。大倭より西の帝塚山住宅でも目撃されています。(のん)

東光大祭 祭典のご案内

令和6年8月18日(日曜日) 旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。正午から、奥津斎庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わり次第、拝殿に教長さんをお迎えして東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。祖霊祭の間、拝殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花邑の記録映像等をご用意します。

【ご注意】 祖霊祭の経木への書き込み受付は7月15日まで。日数に限りがありますので、お忘れのないようお願い致します。

あんない

*月次祭(大倭神宮)
7月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会
7月14日(日) 午後2時より大倭拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)
7月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
7月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

表紙写真によせて

5月1日突然「この辺りに鹿

「えっ、タヌキはおるけど……」のやり取り、外を見ると鹿の姿が。頭を見ると角の切られた跡。奈良公園からやってきたんだと気付きました。大倭より西の帝塚山住宅でも目撃されています。(のん)